

ピアノの誕生

学校の音楽室や体育館など身近なところにある楽器、ピアノ。今でこそポピュラーな楽器のひとつですが、現在の姿にたどり着くまでにはさまざまな歴史がありました。その一部を少しのぞいてみましょう♪



【ピアノのご先祖様】

チェンバロ（ハープシコード、クラヴサン）

1397年オーストリアのヘルマン・ポールが発明したという記述がある。打鍵によってプレクトラムという爪が弦をはじく撥弦（はつげん）楽器。打鍵で音色や音量の変化をつけることはできないが、プレクトラムの素材等によって音色を変えることができる。その場合、オルガンのようにレジスター（ストップ）を操作する。ヴァージナルやスピネット（エピネット）も同様の撥弦楽器。

クラヴィコード

14世紀ごろ発明される。打鍵によってタンジエントという真鍮片が弦を叩き上げて（打弦）発音する。そのため、打鍵がそのまま音の変化につながる。音が鳴っている間に弦に触れているタンジエントに指の振動を伝えると、ベープク（ヴィヴラート）をかけることができる。打鍵を左右に傾けるとタンジエントが弦に触れる位置が変わり、ポルタートという微妙に音高を変える奏法も可能。

【最初のピアノ】

チェンバロの音色や音量の変化はレジスター（ストップ）によっておこなわれ、奏者の打鍵によって音に表情をつけることはできない。一方クラヴィコードは奏者の意のままの音を出すことができるが、音量が小さい。そこで、クラヴィコードのような打弦機構をもち、音の強弱等が打鍵によって自由に表現できる、より大きな音量の出る楽器が求められるようになった。イタリアのチェンバロ製作者クリストフォリによって1709年に制作された「ピアノ（弱音）もフォルテ（強音）も出せるチェンバロ」が、現在のピアノの原型といわれる。ハンマーで打弦する機構で、エスケープメント（ハンマー運動を自由にする）、バック・チェック（一度打ったハンマーの跳ね返りを防ぐ）というアイデアが画期的であった。

【その後のピアノ】

1730年代半ばにドイツのシルバーマンによって制作されたピアノは、ほぼクリストフォリのピアノの複製だった。しかしその後改良を重ねたものをプロイセン王フリードリヒ2世が購入し、王に仕えていたC.P.E.バッハがこれを演奏した。1747年にはJ.S.バッハも宮殿を訪れ、この楽器を演奏し満足したという。その後シルバーマンの技術はイギリスに渡り、ブロードウッドの楽器製作に影響をもたらす。またドイツ、オーストリアではシュタイン、ヴァルターらが、フランスではエラールらがピアノ製作をし、それらの楽器を用いてモーツァルトやベートーヴェンがピアノ曲を作曲していく。

【もっと詳しい歴史、楽器の図版はこちらで…】

『ピアノの歴史 楽器の変遷と音楽家のはなし』大宮眞琴 音楽之友社 [2.51-0m5](#)

『カラー図解 ピアノの歴史』小倉貴久子 河出書房新社 [2.51-0g9-09](#)

『グラフィック ピアノの歴史』属啓成 音楽之友社 [2.51-Sa29](#)

最近受け入れた新刊・新譜から、おすすめの資料をご紹介します♪



【音源資料】

『ベートーヴェン：ディアベッリ変奏曲』シュタイアー（フォルテピアノ） 請求記号：6J6.77

前ページで触れたピアノの最も初期の頃から19世紀初頭頃までのピアノは、今日フォルテピアノと呼ばれている。このCDではグラーフ（ベートーヴェンの最後のピアノを手掛けたウィーンの楽器製作者）モデルの楽器が使われている。現在のピアノにはないペダル（特にトルコ軍隊音楽風のヤニチャーレン・ストップ）が活用され、いきいきとした音楽を聴くことができる。ベートーヴェンが当時想定したであろう楽器の音色でのこの曲の演奏は貴重で、これまでほとんど録音がなかったそう。フォルテピアノという楽器の魅力、奏者シュタイアーの素晴らしさを知ることができる一枚。

『CD版 永遠の故郷』吉田秀和編 請求記号：3W3.44-48

2012年に他界した音楽評論家、吉田秀和によるエッセイ集『永遠の故郷』（全4巻、当室請求記号：0.9-Y83-1~4）。これに取り上げられた97曲の歌曲が、吉田の選んだ演奏でCDにまとめられた。敢えてそれぞれの国の歌を必ずしもその国の歌手が歌ったものにしなかったのは、ドイツの歌がイギリス人にも日本人にも歌われているように、歌の言葉は国境を越え、民族に縛られず、意義のあるものになっていくからだと言っている。解説、訳詩を含めて、彼の音楽や歌手に対する想いを深く感じる内容。

【図書】

『クララ・シューマン ヨハネス・ブラームス 友情の書簡』リッツマン編（原田光子編訳）

みすず書房 請求記号：6.9-Sch86-13

1950年刊行の図書が復刊され、読みやすくなった。シューマンが亡くなる3年前にあたる1853年から、クララが亡くなる1896年までの44年間にわたって交わされた、クララとブラームスによる書簡集。二人が交し合った手紙からは、それぞれのありのままの心の揺れ動きが感じ取れる。二人の間に結ばれた友情の深さ、ブラームスの献身的な愛情、クララの寛大な精神と忍耐力を改めて知ることができる貴重な資料といえるだろう。

♪はじめてクラシック♪

前号に引き続き、クラシック音楽初心者の方にも楽しんでいただけるような資料をご紹介します♪

モーツァルト作曲：『ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488』 請求記号：1E2.25、3E9.69

モーツァルトといえば、多くの人知っている天才作曲家。交響曲からオペラ、ピアノ曲、室内楽曲など作品は多岐に渡る。その作品の多くは明るく軽やかな長調が印象的だが、短調（暗い曲調）の音楽も魅力的だ。『ピアノ協奏曲第23番イ長調』は、そのどちらも楽しむことができる一曲。三つの楽章のうち、第1楽章と第3楽章は長調、第2楽章は短調となっている。どの楽章も親しみやすいフレーズがありCMなどにも使われているが、やはり第2楽章の美しさは特筆すべきだろう。何度聴いても儂い夢のような幻想的な雰囲気を感じ、胸がキュンとするのは筆者だけだろうか。ぜひあなたもこの気持ちを味わって♪

2013年12月発行 東京文化会館音楽資料室